

Title	大東亜文学賞受賞作『貝殻』の再検討：1940年代の「華北文学」をめぐる日本人文学者の認識と論争
Author(s)	彭, 雨新
Citation	間谷論集. 2022, 16, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/91347">https://doi.org/10.18910/91347</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈研究論文〉

## 大東亜文学賞受賞作『貝殻』の再検討

——1940年代の「華北文学」をめぐる日本文学者の認識と論争——

彭 雨新

〈キーワード〉 大東亜文学賞 華北文学 燕京文学社 袁犀

### 1. はじめに

1943年8月、中国人作家袁犀（1920-1979）の長編小説『貝殻』（新民印書館、1943）は中華民国（華北地方）の代表として、第一回大東亜文学賞<sup>1</sup>の次賞に選ばれた。この受賞が日中両国の文学界において批判と論争を招いたことは、郭（2000）、張（2005）、岡田（2013）をはじめとする先行研究でしばしば指摘される通りである。ただ、それらの指摘にはある問題点がある。それは中国側の批判は主に『郭隣』、『中国文芸』などの中国語雑誌に見られるものの、日本側の論争については、それを直接反映した一次資料が見つからなかったため、その詳細は不明のままであったということである。本稿では、中国での調査によって発見した、日本占領期の北京で発行された日本語新聞『東亜新報』などの資料を用い、『貝殻』の受賞をめぐる日本文学者の言説を考察する。

本稿では、とりわけ以下の三者の言論に着目したい。第一に、大東亜文学賞の審査委員長を務めていた久米正雄（1891-1952）である。久米はこの時期における内地作家の代表であると同時に、『貝殻』に賞を与えた直接の責任者とも言える人物である。第二に、当時、日本占領下の北京で文化官僚を務めていた志智嘉九郎（1909-1995、筆名志智嘉、中国名江濤）である。志智は1939年以来、興亜院華北連絡部、改組後在北京日本大使館文化局調査官として、日本占領期の北京文壇と深い関わりを有していた。第三に、北京に滞在していた現地日本文学青

年によって作られた文学団体・燕京文学社である。燕京文学社は日本内地文壇からも占領地当局からも距離を置く一方で、袁犀の所属する華北作家協会とは密接な関係にあった。

1937年、日本が北京を中心とする華北地方を占領した後、北京における主要な文化・教育機関とともに、周作人、錢稻孫等の少数の作家・学者以外の有名な作家や文化人たちが大量に北京から離れ、占領前中華民国の文化的中心地の一つであった北京の文壇が一時的に荒廃した状態となっていた。小説『貝殻』は、1939年に袁犀が満洲国から北京に移住した4年後に書き上げられた作品であり、いわゆる「事変以来の新生華北文学」である。内地文壇と占領地文壇という立場の異なる日本人文学者による、「新生華北文学」に対する認識の差は、大東亜文学賞の受賞を契機として顕在化するようになる。本稿ではこの点にも目を配りたい。

## 2. 作家袁犀と『貝殻』の「受賞論争」

袁犀は中国近現代の小説家である。1920年8月遼寧省瀋陽に生まれ、本名は郝慶松、ほかに梁稻、呉明世、郝赫などのペンネームがある。新中国建国以降発表した長編小説、映画脚本などでの署名は李克異である。1939年から1944年の間に北京文壇で活躍し、北京の文芸雑誌で小説を大量に発表した。代表作には、短編小説集『泥沼』（瀋陽文選刊行会、1941）、長編小説『貝殻』（北平新民印書館、1943）、短編小説集『森林的寂寞』（北平華北作家協会、1943）、長編小説『面纱』（北平新民印書館、1944）、短編小説集『時間』（北平文昌書店、1945）がある。

袁犀の『貝殻』は1943年に新民印書館から出版され、占領下の北京では「事変以来の新生華北文壇」における最初の長編小説の単行本だと見なされ、日中文化人の注目を浴びていた<sup>2</sup>。小説は約12万字で、近代中国の知識人青年男女の日常生活における個人主義精神の苦悩・矛盾・破綻を描いている。

『貝殻』は、出版同年の8月、第一回大東亜文学賞の次賞を受賞した（正賞なし）。『貝殻』の受賞をめぐる華北文壇の反響については、中国側の研究成果が多く見られる。郭（2000）、張（2005）、岡田（2013）などの先行研究により、『貝

殻』受賞をめぐる『東亜新報』紙上での論争について今までに分かっている情報は主に以下の三つである。

一つ目は、当時、北京の文学界にも大きな発言力を持っていたと言われる興亜院華北連絡部の調査官であった志智嘉（志智嘉九郎）が、『貝殻』受賞に激しく異議申し立てを行い、1944年1月に「文芸雑談」<sup>3</sup>という批判の文章を発表したことである。志智嘉はこの文章で『貝殻』を「価値のない小説」だと批判し、とりわけ登場人物は「現実的ではない」「生気がない」と述べている。この文章が後の『東亜新報』における論争と深く関わっている。

二つ目は、『東亜新報』の学芸記者であり燕京文学社同人でもあった中菌英助が、『北京飯店旧館にて』（筑摩書房、1992）、『北京の貝殻』（筑摩書房、1995）などの小説の中で袁犀をモデルに創作を行い、「そのとき邦字紙の学芸欄で『貝殻』を知識層男女青年の退廃的な風俗小説として、受賞の是非を云々する論争が扱われた」<sup>4</sup>と書いているため、『東亜新報』では『貝殻』の受賞をめぐる論争があったのが分かることだ。

三つ目は、張（2005：58）が提示している志智嘉「何を基準に受賞したか」という『東亜新報』掲載文章の断片である。張の引用は、中国語雑誌『郭隣』1巻4－5期（1944年5月1日）が翻訳した中国語記事からの孫引きであり、『東亜新報』の原物と記事の日本語原文は未見である。岡田（2013：146）は張（2005：58）によって提示された『郭隣』の中国語記事を再び日本語に翻訳し、『東亜新報』における論争に言及した。ゆえに、雑誌『郭隣』に掲載されている中国語に訳した志智嘉の文章の断片はこれまで、参照できる論争に関する唯一の一次資料であった<sup>5</sup>。

このように、『貝殻』受賞をめぐる華北文壇の反響、とりわけ日本語新聞『東亜新報』における日本人作家間の論争が、袁犀研究と日本占領期の華北文学研究において常に注目されてきたが、『東亜新報』が閲覧困難であったため、論争の実情と詳細は不明のままであった。

### 3. 占領下北京の日本語新聞『東亜新報』

先行研究で度々言及されている『東亜新報』とは、1939年7月から1945年の

終戦まで、主に北京で発行されていた日本語新聞である<sup>6</sup>。対米英戦に備えて大陸在留民指導のため、揚子江以北の地域で北支軍と北京大使館が株主となり、当時、北京、天津、済南、青島などで在留邦人が経営していた日本語新聞を統合して、『東亜新報』を発行した。『東亜新報』については、「北支軍の機関紙」、「国策新聞」<sup>7</sup>として語られることが一般的であるが、文化・文芸面のコラムや記事は、日本占領下の北京や華北の文化生活、社会状況、習慣・風俗などを検討する際、現地日本メディアの視点として重要である。例えば神谷（2016：24）は、『東亜新報』主筆である高木健夫<sup>8</sup>が書いた「北京横丁」「北京百景」をはじめとするコラムや記事は北京や中国（おもに華北）の生活や文化、習慣、風俗などを覗き見趣味や優越的な視点からではなく取り上げていて、その息吹を感じさせるものが数多くあると指摘している。

しかし、『東亜新報』は日本における所蔵がきわめて少なく、中国における所蔵状況も近年まで確認されておらず、参照できる資料は、戦時中の新聞社の同人によって書かれた東亜会〔編〕『東亜新報おぼえがき：戦中・華北の新聞記者の記録』（東亜会、1984）、当時の新聞社における編集者、主筆などの重要人物に関する資料、例えば、東亜会有志〔編〕『新聞人・徳光衣城』（東亜会有志、1969）<sup>9</sup>、及び当時『東亜新報』の学芸記者であった中藪英助が戦後に書いた小説くらいであった。よって、『東亜新報』に関する研究は日中両国ともやや遅れていたといえる。一方、中国における所蔵の調査をめぐる先駆的な研究は、戸塚麻子、神谷昌史の研究である。とりわけ神谷（2016）は、『東亜新報』創刊期を中心に新聞に関する基本情報をはじめ整理し、大量に提示している。また、戸塚（2016）と戸塚・神谷（2017）も『東亜新報』を資料として、それぞれ燕京文学社の同人長野賢（野中修・朝倉康）が占領下北京で創作した小説と高木健夫「北京百景」について検討した。戸塚、神谷が現時点で公開している研究論文から見ると、両氏は1939年から1941年頃までの『東亜新報』を写真保存していると思われる。

そのような状況の中、筆者は『東亜新報』を中心に、日本占領下の北京で発行された現地日本語メディアの保存状況を中国で調査した。中国の上海図書館は『東亜新報』の所蔵を公開していないが、分館の徐家匯蔵書楼には、1939年7月から12月；1940年、1941年全部；1942年1月から5月、7月から12月；1943

年2月、3月、5月から12月；1944年1月から6月；1945年1月から5月分の原本が保存されていることが明らかになった。『東亜新報』は日本占領期の華北における重要な日本語新聞であるが、上述のような保存状況のために新聞の現物を読むこと自体が困難であり、中国ではまだ体系的な先行研究が見られない。袁犀の『貝殻』が大東亜文学賞を受賞した後に、それをめぐる論争が行われたことは確かであるが、実際にどのような人が論争に参加し、論争の焦点はどこにあったのかはまだ明らかになっていない。そこで本稿は、『東亜新報』の調査結果を用いて『貝殻』の受賞をめぐる文学史研究の空白の一端を埋めることを目的とする。この研究は作家の作家研究にとどまらず、植民地文学研究全体の進展に寄与する価値があると考えられる。

#### 4. 『東亜新報』における袁犀『貝殻』をめぐる報道

##### 4-1. 燕京文学社同人による『貝殻』の初期評価

『東亜新報』は1943年下半年から、『貝殻』の華北新進作家集としての出版や<sup>10</sup>大東亜文学賞の受賞について報道し始めた。『貝殻』出版の報道の直後の1943年6月には、華北作家協会と親交があった燕京文学社同人である行田茂一（長谷川宏）が『貝殻』の書評<sup>11</sup>を発表した。長谷川宏は華北作家協会のメンバーと親しい友好関係を持っていた。長谷川が『東亜新報』で袁犀『貝殻』の書評を発表したのは、彼と袁犀の斡旋で「僑華日本作家作品特輯」が中国語雑誌『東亜連盟』に掲載された時期であった<sup>12</sup>。

『貝殻』の書評に戻ると、長谷川はまず袁犀が満洲から北京に来てから創作した作品を紹介し、袁犀の「動的でたくましい描写力」を称賛し、若くて多産な作家として多大な期待を示している。その一方、「袁犀の情熱は、つい登場人物にお饒舌りをさせ過ぎる。教養が苦悩をつくり、知識が罪悪を生み出す異常な状態を憎むといふ一つの段階から、さらに激情を深い透徹したものへと磨きつつ、中国社会の異常な状態から脱出する真の人間を、日常生活の人間を描き出さなくてはならぬ。ほんたうの人間は、そんなには饒舌らぬものだ」<sup>13</sup>と、登場人物における問題点も指摘している。この長谷川の書評は受賞の前に書かれており、志智嘉の『貝殻』批判よりも前であるため、純粹に文学の観点からの書評だと言え

る。後の志智の『貝殻』の登場人物に対する批判には長谷川との共通性が見られ、長谷川説に影響されている可能性がうかがえる。

1943年8月27日午後、第二回大東亜文学者大会の本会議にて、大東亜文学賞の受賞者が発表された。翌日の『東亜新報』朝刊はすぐに、「初の大東亜文学賞北京の袁犀氏も誉れの受賞」という記事で袁犀『貝殻』の受賞を報道した（『東亜新報』1943年8月28日）。その文章には作者袁犀の概況と『貝殻』のあらすじが紹介されているほか、「無気力な自由主義的青年男女の生活に鋭い批判を加へた内容と作者の意図とは新中国の文学として注目すべき反響を青年読者層に呼び起こした」と評価されている。また、袁犀は当時華北作家協会の日本視察団の一員として大東亜文学者大会に出席していたため、『東亜新報』は留守宅の袁犀夫人にインタビューして、感想を語らせた。

その後、『貝殻』をめぐる記事は『東亜新報』紙上にはしばらく見られないが、1944年2月になると、燕京文学社の主要同人である飯塚朗が「北京の友へ」<sup>14</sup>という連載コラムで『貝殻』の受賞を批判した。とりわけ推薦した人の無責任と大東亜文学賞の甘さに不満を語り、「文学の側にも、買弁的性格があるのを打破しないかぎり、我々は直下にぶつかり合へないのだ」と述べている。また、飯塚は、『貝殻』の受賞が「偶々あの単行本が出てみた偶然性以外の何物でもない」、「僕は袁犀君も知つてゐるし、何か云へない感じもするのだが、只この作品をちやほやすることによつて、袁犀君を損するとしたら、萌生えやうとする文学への、大きな損失だと思ふのだ」<sup>15</sup>と述べている。飯塚と袁犀は、この時期に華北作家協会と燕京文学社の間で行われていた「中日文学青年交換書簡」の交流相手であったため、親交を持っていたと思われる。飯塚の『貝殻』受賞への批判からも、彼の袁犀との友情と、日本占領下に再び「萌生えやうとする」華北文学への思いやりが読み取れる。

#### 4-2. 引田春海「『貝殻』に関して」（1944）

1944年2月末から3月初めかけて、同じく燕京文学社の主要同人であった引田春海（1914-？、本名：木田春夫）は、『東亜新報』で『貝殻』に関して<sup>16</sup>という文章を連載した。引田は小学校の時に中国に渡り、1939年に北平中国大

学国文科を卒業した後、興亜院に勤めていた。1939年4月から燕京文学社に参加し、『燕京文学』の編集兼発行人になっている。引田の小説「居留地の春」<sup>17</sup>は、燕京文学社同人の中で最初に中国語に翻訳され中国の雑誌に掲載された小説だと思われる。引田が長期間中国に居留し中国の大学を卒業していたからかも知れないが、彼は日本占領期の北京文壇において多くの北京青年作家と付き合いがあった<sup>18</sup>。

引田春海は文章の中で、『貝殻』の人物造形、肉体描写（性描写）、構成、言語など、様々な視点から詳しく分析を行った。引田の文章には上述の志智嘉「文芸雑談」（1944年1月）の引用と引田なりの異なる感想が書かれており、3月末から4月初めかけて志智嘉もまた『東亜新報』で文章を連載し、引田を意識しながら『貝殻』の受賞を再論した。このように、燕京文学社同人は袁犀と『貝殻』に出版当初から注目していたわけであるが、中藺英助が小説の中で回想している「論争」とはこの引田と志智の連載文章を指しているのであろう。

引田春海の連載に戻ると、引田は以下のように志智嘉と違う見解を述べている。まず、引田は『『貝殻』に関して（1）批評と作品と作者と』（2月26日）の中で、『『貝殻』は一種無意味な小説』であり、「梅娘女史の『魚』は確に遙に『貝殻』以上に優れ」ているという志智の言論に対して、「袁犀の『貝殻』も梅娘の『魚』も文学の本質を幾らか離れてゐることは同様である（但しこれ等の作品が単に無意義であると抛出されるものではないことは華北の厳しい現実を眺めるならば自ら判る筈である）」と違う意見を述べている。引田は長い間北京に住み、現地の文学団体の中心人物として、日本占領期の北京文壇の厳しい状況を心より実感しているはずである。ゆえに、引田春海から見ると、袁犀の作品にしても梅娘の作品にしても、いずれも華北文壇の「厳しい現実」の中で辛うじて生み出された新しい華北文学である。袁犀か梅娘かというように個別の作家・作品の優劣を評価するよりも、「華北文学」全体の努力を重視すべきという見解である。

次に、引田は『『貝殻』に関して（3）人物を裏付ける生活』（2月28日）では、『貝殻』の人物について志智嘉と異なる見解を述べつつ、未熟な新進文学作品として抱える問題点も明確に指摘している。

この青年達は志智嘉氏の言ふやうな「現実の人物ではない」のではなくて遙かに現実に見得る人物でもあるのである。ところが作者はどうした譯か、かかる現実の内部に対して深くメスを入れなかつた。(中略：筆者) 実はこの小説の思想的内容となるべき真の知識なり、教養なり、現代生活に於ける文化意識なりはその片鱗も最後まで暗示されなかつたのである。(中略：筆者) 更に言へば描かれている人間が少しも生活を持つてゐない(現実の人物で無いと云ふ意味でなく、現実の人物を裏付ける生活が無いと) ことは作者の人間に対する愛情を疑はれても致し方ないであらう。

(引田春海『貝殻』に関して (3) 人物を裏付ける生活」1944年2月28日)

実は、志智嘉に反論することや大東亜文学賞を批判することなどは、そもそも引田の文章の主旨ではない。「人物を裏付ける生活」、「典型化が失敗した理由」、「周到に用意された構成」といった連載の副題から、引田が『貝殻』という文学作品そのものの分析に力を注いだことが読み取れる。

例えば、引田はヒロイン李玫の人物描写を取り上げ、「それを読んで行つてもどうもその様な筋書きと結末になる必然性が稀薄なのである」<sup>19</sup>、「作者は出場人物の全部を典型化さうと努力してゐる様であるが、生き生きしてゐないのはなぜであらうか。それは、作者の眼が実在の生活を持った人間を描くにはあまりにも概念的である為である。要するに作者のある人物を描かうとする意欲は正しいのであるが、形だけは整つてゐても人体の急所を突いてゐない素描が生命を持たないと同様に、生きてゐないことからくる」<sup>20</sup>と述べ、人物を貫いた真理(または真実)がないため、人物描写が概念的で、典型化に失敗していると分析した。

また、引田は『貝殻』に関して (4) 典型化が失敗した理由」(2月29日)の中で、『貝殻』全篇を貫く卑俗で歪曲された肉体性を批判し、袁犀が読者の興味を引くためにわざと「現実の暴露」を書き、「読者の卑俗性に諂つてゐる」、「モーパッサンは描かれてゐる肉体本能によつて厳粛な真理を裏付けていつたが袁犀は単に肉体本能によつて物語を展開してゐる」と指摘している。

そして、『貝殻』に関して (5) 周到に用意された構成」(3月2日)の中で、技巧性が露骨すぎる構成を指摘し、「この点読者の興味をそゝるのに非常に役立

つてはみるが、或る所ではそれが幾分探偵小説趣味に陥つてゐる嫌ひがないでもないのは遺憾である。構成無くしては小説になり得ないが無技巧に真の技巧を感じるが如く淡々たる中に真の構成が有ることも気付く可きではなからうか」と述べている。また、言語表現の面において、「志智嘉氏が芸文で袁犀の文章に中国語の美しさを感じないといつてゐる」のに対し、引田も小説における会話らしくない会話があることや「文章はまだまだ練つて貰ひ度い」など、似通つた感想を述べている。

引田の言論には志智嘉に言及する箇所がいくつか見られるが、それに反論するというより異なる視点から意見を述べており、小説そのものの問題点に対する指摘は、むしろ引田のほうが具体的で厳しい。引田自身にも、この文章は「恐らくは酷評となつた」<sup>21</sup> という自覚がある。しかし、志智嘉を含む他の論者と異なり、引田は以下のように新生華北文壇の代表作家である袁犀に対する深い理解と友情を示している。

「貝殻」の作者袁犀は僕の友人である。袁犀の作品が好かれ悪かれ、彼の友人であることには間違ひはない。しかもこの友人であることに於て、恐らく僕は彼の書く小説よりも多く彼を理解してゐるであらう。彼が現実の生活に苦惱し模索し、あらゆるものに影響されながら多くの小説を書き、無論若い作家として自己を完成してゐよう筈もないが、自ら良しと想ふ儘にひたすら生命を削りつゝ書き続けていつた彼自身を、僕はよく知つてゐる。

(引田春海『『貝殻』に関して(2) 文学者としての刻苦』1944年2月27日)

今まで「貝殻」に関する批評を見たり聞いたりして、何か作者に対するほんたうの愛情が缺けてゐるのではないかと思つたりし、また袁犀があれを書かねばならなかつた直接的な動機と、その情熱に対して誰よりも感じてゐる一人でもあるし、ついに勇を奮つて駄筆を弄したのであつて、これが若し他の作家のことであつたなら筆を取る勇氣は更に出なかつた筈である。

(引田春海『『貝殻』に関して(6) 高い理想で貫くべし』1944年3月4日)

#### 4-3. 志智嘉九郎の「反論」と久米正雄の証言

引田春海の情熱的な酷評に続き、志智嘉は「与へられた反省の動機」（3月25日）、「何を基準に受賞したか」（3月26日）、「見も知らぬ作品に受賞」（3月28日）、「私は「貝殻」をかう見る」（3月30日）、「第二次受賞は慎重に」（4月1日）という一連の文章を『東亜新報』で連載し、引田に反論した。

まず、志智嘉は「私は「貝殻」をかう見る」、「第二次受賞は慎重に」という文章の中でも、『貝殻』に対する批判を引き続き語っているが、主な観点は、彼が中国語雑誌で発表した内容とほぼ一致している。志智にとって、『貝殻』の文学作品としての欠点は以下の三点である。第一に、この小説が極めて観念的であること。第二に、作中人物が中国人としての国民性を持っておらず、名字を変えればどの国の人物でもなり得ること。第三に、この小説には恋愛遊戯だけが描かれていて、生活が描かれていないことである。さらに、現地の文化官僚である志智から見れば、『貝殻』のような優れていない作品に大東亜文学賞を与えてしまったことは、占領地文壇に対する文化統治にも極めて悪い影響をもたらしたのである。志智は「見も知らぬ作品に受賞」（3月28日）の中で、「露骨に言へば貝殻に文学賞をやる位であるなら、日本の文学や文学者もたかが知れておると思はせる危険が多い」と述べている。レベルの低い作品に文学賞を与えることは、中国人に日本の文学賞は大したものではないと思わせ、日本の文学を軽蔑されてしまう危険性があると志智は考えていたのである。そのため彼は、このような影響を招いた「文学者大会、ことにその中核たる文学報国会の軽率は嗤はれなければならぬ」と強く批判した。ゆえに、志智は「第二次受賞は慎重に」（4月1日）の中で、占領地における日本文学の権威性をこれ以上失墜させないように、現地文化官僚としての立場を以下のように明確に主張している。

第三回大東亜文学者大会が近く南京に開催されるといふ。日華両国の文化交流には重要な意義を持つ会である。私はこの大会がその持つてゐる重大なる使命を完全に遂行することを希望するが故に、もし大東亜文学賞が継続して与えられるものならば充分慎重なる態度を以て作品を選定されんことを、日華両国の健全なる文化交流の為に切望して已まない。

(志智嘉「第二次受賞は慎重に」1944年4月1日)

ここから、大東亜文学賞の授与は単なる個別の文学作品を評価するのではなく、「日華両国の健全なる文化交流」を保つ手段でもあると志智が考えていたことが読み取れる。その「健全さ」は、ある意味で日本の「大東亜共栄圏」の諸地域に対する文化的権威性、優位性によって保たれた虚構のものであると理解できる。

また、もう一つ注目すべきことは、当時大東亜文学賞の審査委員長を務めていた久米正雄に関する言論である。「見も知らぬ作品に受賞」の中で、志智嘉は去年の秋北京に訪問した久米正雄に受賞のことについて詰問し、『貝殻』は『大東亜文学賞』といふやうな偉大なるべき名誉を獲得する程の優れた作品ではなく、このような作品に受賞させたことは「日本の文学者の見識」、「日本現代文学の高さ」について誤解を起さしめると文句を言っている。それに対して、久米は微苦笑を浮かべながら、志智に次のように説明したという。

いろいろな事情から華北にも文学賞を出さねばならぬことになったが、文学報国会の人は華北に今どんな作品が出てゐるか誰も知らなかつたので、大会に出席した華北代表に推薦を依頼したところ、梅娘の「魚」を推薦して来た。ところが華北代表の団長格たる柳龍光氏が彼の夫人である故を以て辞退したので、已むを得ず貝殻に受賞したのである（已むを得ずと言ふのは、その当時華北では貝殻と魚の二つしか候補者が無かつたからである）。文学報国会のこの事に関係した人で之らの作品を読んだ者は勿論、書物を見た者すらゐなかつたといふ実情である。

(志智嘉「見も知らぬ作品に受賞」1944年3月28日)

さらに、志智は文章の最後に、「この久米氏の話は私のみならず、当時そこに同席した諸氏も聞いてみたところである。そして先日来燕した小林秀雄氏も久米氏と同じやうな話をしてみた」と強調した。久米正雄が語る「受賞の実情」は、まさに日本の内地文壇の「華北文学」に対する認識の乏しさを暴露している。

この時代の「華北文学」をはじめ、日中戦争期の中国における日本の植民地・占領地の文学・文学者・文壇の存在は長い間意識的に忘却され、無視されてきた。中国文学史においては、日本占領期の華北文学は歴史的には全く無価値な「暗黒時代」とみなされ、1980年代まで研究の対象から除外されてきた。一方、1940年代の近衛文麿内閣が主張する「東亜協同体論」の枠組みのもとでは、華北地方も「大東亜共栄圏の諸地域」の一部であり、当然「大東亜文学賞」の授賞対象に取り入れなければならなかった。しかし、久米の言った「華北にも文学賞を出さねばならぬ」ということは、形式上の理由以外の何物でもなかった。実際、日本文壇は「大東亜共栄圏の諸地域」の文学を把握することもできなかったし、自国の文学史の中に取り入れる能力も当然なかった。結局のところ日本占領期の華北文学は、日本文学史の中にも中国文学史の中にも位置付けられなかったのである。

#### 4-4. 1940年代の「華北文学」をめぐる日本文学者の認識と論争

全体的に見ると、『東亜新報』における志智嘉の連載文章は引田春海の言論を強く意識しながら書いたものだと読み取れる。しかし、外地文壇の「指導者」である文化官僚と反骨精神を持つ居留民文学青年、北京現地に根差している立場の異なる二人の主張は意外にも完全に対立していたわけではなく、むしろ作品に存在している同じ問題点や受賞騒ぎについて異なる側面から意見を述べていると理解できる。ゆえに、中藪が小説の中で回想しているような「論争」というよりは、1940年代の日本知識人が異なる立場と視点から『貝殻』とその受賞をめぐる行った議論だったと言える。しかし、久米正雄の発言から、日本内地の文壇を代表する日本文学報国会が、華北の文学作品について何も知らないまま、ただ文学における国策協力という政治的目的を果たすために、いかにも軽率に『貝殻』に賞を与えたことは明らかである。

志智嘉の連載が終わった五日後、燕京文学社の中の最も若い同人であった清水信も追って「わが貝殻談」を『東亜新報』に載せた。清水は、『貝殻』については既に語られ過ぎた。そして今は却って、この小説についての正当な批評論文などは一つも無かったといふことだけが明らかになった」と述べており、受賞騒ぎ

ではなく、『貝殻』に関する真面目な文芸批評を望んでいる。また、文章の最後には「袁犀万歳！華北文学万歳！」という情熱溢れる表現があり、ここからは、現地日本文学青年の『貝殻』と袁犀への真の関心と、華北文学に対する純粋な理想を強く読み取ることができるのである。

## 5. おわりに

本稿は『東亜新報』紙上で行われた袁犀『貝殻』の受賞をめぐる論争の詳細について考察した。まず、1940年代の日本の内地文壇は、華北文学に対して無知かつ無関心の状態であった。また、北京現地の文化官僚は、賞に選ばれた華北文学作品を占領地の文化統治に有意義かどうかで判断する傾向にあった。しかし、燕京文学社を代表とする一部の外地文学者は、占領下という厳しい現実の中で生存しようとしている華北文学に、深い理解と純粋な愛情を語っていたのである。このような戦時文学史の知られざる一側面を『貝殻』の受賞論争によって浮き彫りにすることは、日本占領期の日中文学交流研究において大きな価値を有するのではないだろうか。

## 注

- 1 大東亜文学賞は、1942年11月3日から9日にかけて東京で行われた第一回大東亜文学者大会にて、華中代表の丁雨林が提案し、日本文学報国会事務局が引き取って創設した国策文学賞であると言われている。大東亜文学賞は主に「大東亜共栄圏」の諸地域に住んでいる作家の作品に賞を与えるもので、第一回（1943年8月）では、日本、満洲国、中華民国という三地域の作家・作品に授賞した。第二回（1944年11月）では、タイとフィリピンという南方地域を加え、五つの作家・作品に賞を与えた。賞金は毎日新聞社が出資したものであるが、全二回を通じて正賞は選ばれず、いずれも次賞であった。
- 2 行田茂一「書評 長編小説『貝殻』袁犀著（新進作家集第一集）」、『東亜新報』1943年6月11日。
- 3 『芸文雑誌』2-1（1944年1月）、p.23。
- 4 中藺英助『北京飯店旧館にて』（筑摩書房、1992）、p.178。
- 5 文章の初出は『東亜新報』1944年3月26日。張（2005：56）は、志智嘉「關於最近

之文学作品」(『庸報』1943年10月6-8日)という文章も提示し、志智嘉が『貝殻』の「現実性」と「国民的特性」の欠如を批判していると述べている。

- 6 東亜会 [編]『東亜新報おぼえがき：戦中・華北の新聞記者の記録』(東亜会、1984)によると、『東亜新報』は北京のほか、中国の徐州、石門、天津、済南、太原、開封に支社を置き、それぞれの地域の新聞を発行していた。しかし、『東亜新報』地方版の保存状況は不明で、発行時期も比較的短いため、ここでは取り上げない。
- 7 東亜会前掲編書、「序」、pp.3-4。
- 8 高木健夫(1905-1981)は日本の新聞人。『東亜新報』編集局における編集総務の一人であり、主筆でもある。
- 9 東亜会有志 [編]『新聞人・徳光衣城』(東亜会有志、1969)は出版地不明。徳光衣城(1884-1953)は日本の新聞人。東亜新報社の代表取締役社長。
- 10 「第一集“貝殻”華北新進作家選集を出版」、『東亜新報』1943年6月6日。
- 11 行田前掲書評。
- 12 「僑華日本作家作品特輯」の詳細については、拙稿「日本占領下の北京文壇と燕京文学社—華北作家協会による翻訳と特輯を中心に」『跨境／日本語文学研究』第12号を参照。
- 13 本論文における旧仮名・旧漢字の引用文では仮名遣いは原文のままとし、漢字及び繰り返し記号は適宜現行のものに改めた。また、『東亜新報』記事などの引用は、原本には改行などにより句読点が付いていない場合があるため、該当箇所には全角スペースを置いた。
- 14 飯塚朗「コラム 北京の友へ」、『東亜新報』1944年2月9、10、11日(「東京へ帰りついて」、「新中国文学に忠言を」、「新年の静かなる覚悟」)。
- 15 飯塚朗「新中国文学に忠言を」、『東亜新報』1944年2月10日。
- 16 引田春海「『貝殻』に関して」、『東亜新報』1944年2月26、27、28、29日、3月2、4日連載。
- 17 1942年9月14日脱稿。日本語原文の初出は『燕京文学』第13号(1943年3月25日)であるが、中国語翻訳「商埠地之春」『国民雑誌』第2巻第10期(1942年10月)のほうに先に発表されている。
- 18 『東亜連盟』5巻6期(1943年6月)、p.53。
- 19 引田春海「『貝殻』に関して(3)人物を裏付ける生活」、『東亜新報』1944年2月28日。
- 20 引田春海「『貝殻』に関して(4)典型化した失敗の理由」、『東亜新報』1944年2月29日。
- 21 引田春海「『貝殻』に関して(6)高い理想で貫くべし」、『東亜新報』1944年3月4日。
- 22 志智嘉「何を基準に受賞したか」、『東亜新報』1944年3月26日。

## 参考文献

- 岡田英樹 (2013) 「大東亜文学賞授賞の波紋－袁犀「貝殻」を読む」同『続：文学にみる「満洲国」の位相』研文出版、pp.142-160.
- 郭偉 (2000) 「袁犀『貝殻』と大東亜文学者大会次賞－中蘆英助「北京の貝殻」におけるその意味」『比較文学』(43)、pp.90-105.
- 神谷昌史 (2016) 「『東亜新報』研究のためのおぼえがき：創刊期を中心に」『滋賀文教短期大学紀要』(18)、滋賀文教短期大学、pp.17-24.
- 戦前期中国関係雑誌細目集覧刊行会 [編] (2018) 『戦前期中国関係雑誌細目集覧』三人社.
- 戸塚麻子 (2015) 「『燕京文学』細目」『滋賀文教短期大学紀要』(17)、滋賀文教短期大学、pp.54-81.
- 戸塚麻子 (2016) 「日本占領下北京の友情と青春：長野賢（野中修・朝倉康）の『燕京文学』掲載小説をめぐって」『滋賀文教短期大学紀要』(18)、滋賀文教短期大学、pp.25-37.
- 戸塚麻子 (2017) 「創刊期『東亜新報』（一九三九）の文芸・文化記事について：日本占領下北京の日本語新聞」『常葉大学教育学部紀要』(38)、常葉大学教育学部、pp.1-9.
- 戸塚麻子・神谷昌史 (2017) 「高木健夫『北京百景：『東亜新報』掲載時における題目一覧』」『滋賀文教短期大学紀要』(19)、滋賀文教短期大学、pp.1-11.
- 彭雨新 (2021) 「日本占領下の北京文壇と燕京文学社－華北作家協会による翻訳と特輯を中心に」『跨境／日本語文学研究』(12)、高麗大学校日本研究センター、pp.254-264.
- 張泉 (1994) 『沦陷时期北京文学八年』中国平和出版社.
- 張泉 (2005) 『抗战时期的華北文学』贵州教育出版社.

## 使用テキスト・資料

## ・小説：

- 中蘆英助『北京飯店旧館にて』（筑摩書房、1992）.
- 中蘆英助『北京の貝殻』（筑摩書房、1995）.
- 袁犀『貝殻』（新民印書館、1943）.
- 梅娘『魚』（新民印書館、1943）.

## ・回想：

東亜会 [編] 『東亜新報おぼえがき：戦中・華北の新聞記者の記録』(東亜会、1984)。

東亜会有志 [編] 『新聞人・徳光衣城』(東亜会有志、1969)。

## ・新聞・雑誌：

『東亜新報』1939年7月－1945年5月、北京：東亜新報社。

『燕京文学』1939年4月－1944年9月、北京：燕京文学社。

『中国文藝』1939年9月－1943年11月、北京：中国文藝社。

『国民雑誌』1941年1月－1944年12月、北京：国民雑誌社。

『東亜連盟』1940年5月－1945年1月、北京：中国東亜連盟協会。

『郭隣』1944年1月－1945年2月、北京：華北善隣会。

## 付 記

本稿は、2017年度東アジアの植民主義と文学研究会第三回年度大会での口頭発表に基づき、大幅な加筆訂正を行ったものである。また、本稿は、2021年度北京市社会科学基金科学研究費「近代在華日僑文人的北京書写与文化認同研究」(課題番号：21WXC012)の研究成果の一部である。

ホウ ウシン (北京第二外国語大学日本語学院)

**An Exploration of Historical Materials about the Debate on  
Yuan Xi's Award-winning Novel *Shell***  
On the Cognitive Differences and Ideological Divergences about the  
"Literature in North China" in the Japanese Literary World

PENG Yuxin

Yuan Xi (Li Keyi, 1920-1979) is an important figure among the new progressive writers in Beijing during the Anti-Japanese War. His novel *Shell*, published in 1943, won "The Greater East Asia Co-prosperity Sphere literary award" from Japan as a representative of North China of the Republic of China in August of the same year, which triggered a dispute between the literary circles of China and Japan over the award winning of the novel. Criticism on the Chinese side can be seen in the Chinese magazines such as *Guo Lin* and *Chinese Literature and Art*, and the controversy extends to Liu Longguang, Shen Qiwu and other influential figures in the literary world of North China. However, details of the debate remain to be unclear due to lack of first-hand materials. By exploring and examining the relevant historical materials in the Japanese newspapers *Tōashinpo* (*East Asian News*) and *Yenching Literature* in Beijing, we can see the contemporary Japanese writers' understanding of the work itself, as well as the focus and process of the argument over this award-winning event in the Japanese literary world. In addition, by analyzing the remarks of famous domestic Japanese writers represented by Kume Masao, cultural bureaucrats in Japanese puppet government in China represented by Shichi Kakuro, and Japanese writers living in China represented by *Yenching Literary Society*, we can see the cognitive differences and ideological divergences about the "Literature in North China" in the Japanese literary world in the 1940s.

